

城山小学校 第875回 平和祈念式 令和6年7月9日～11日

第875回 7月の平和祈念式は、被爆の実相の継承と平和への願いを新たにすることをねらいとして、長崎市平和推進協会から平和案内人の方を招聘して、被爆体験講話を行いました。子供たちの学年の発達の段階に合わせ、低・中・高学年に分かれてお話をお聞きしました。5・6年生の講師は、池田 道明さん、1～4年生の講師は、三田村 静子さんです。

【池田 道明さん(当時6歳)のお話】

※ 一部、校長の聞き取りにより加筆

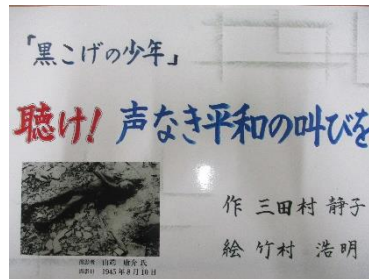
私は国民学校1年生の時、長崎医科大学附属医院で被爆。火炎の中、坂本町から穴弘法さんを経て金毘羅山の高射砲陣地まで逃げ延びそこで1泊。翌10日朝、勝山国民学校へ下り、小川町、駅前、銭座町、岩川町から大学病院へと辿り着き母と再会という行程の中で、眼にし耳にした様々な事を思いおこす時、この様な惨劇を繰り返してはならないと願っています。

大学病院に勤めていた母は、爆風により割れたガスの破片が背中に無数に刺さり大けがを負っていました。医者に見てもらって大きなガラス片は取り除くことができましたが、背中の肉の中に入った小さな破片は残ったままで、長年、母は痛い痛いと言い、母が痛いといったところからは小さなガラスの粒が出てきたことを覚えています。

8月10日に大学病院で母に再会できたものの、病院の中や病院の周辺はとても悲惨な状況でとても怖かったです。病室にはベッドが乱雑に積み重なり、入口には亡くなった入院患者さんの死体がぶら下がっていました。その病室で一升瓶を見つけたので、病院の側の水を汲める場所まで友達と一緒に水を汲みに行くことにしました。一升瓶に水をいっぱいに入れて大学病院に戻っていると、門の所に3人の人が倒れているのを見付けました。3人とも真っ黒こげで倒れていました。自分たちが組んできた水を欲しそうにしていたので、3人ともに水を飲ませてあげました。水を飲んだ後、ありがとうも言わず「はああ。」とため息をつくような感じだったので、なんだか不思議な感じでした。この後、また水を汲みに行って大学病院へ戻っていると、今度は門番のおじさんが倒れていてさっきと同じように水を飲ませてあげました。さっき水を飲ませてあげた3人の人は死んでいました。この人からもお礼も言ってもらえませんでした。また、水を汲んで大学病院に戻って院長先生に話をしました。倒れていた人に水を飲ませてあげたけど、お礼も言わず「はああ。」とため息をつくような感じだったことを…。院長先生は私たちに言いました。「その人たちは、原爆の熱風を吸い込んで声帯や喉、肺が焼けただれて声を出すことができなかつたんだよ。きっとお礼を言いたかつたはずだよ。苦しんでいたところで水を飲ませてもらって、ほっとして安心してお亡くなりになったと思うよ。いいことをしたね。」と。

子供ながらに目にしたこの情景は決して忘れることができません。このような惨劇、つらく悲しくつらい思いを二度と起こしてはなりません。この願いを次世代へ語り継ぐ事こそ、九死に一生を得た私に課せられた使命だと思っています。

【三田村 静子さん(当時3歳)のお話】 体験を紙芝居にしての上演。4年生は「黒こげの少年」



2015年7月、被爆体験70周年記念「原爆写真展」で2人の女性が「黒こげとなった少年」の写真の前で「じっちゃんだ!」と近づき写真を撫でました。2人は姉妹で、その写真の少年が原爆で行方不明になったままの兄、谷崎昭治さん(当時13歳)と直感的に確信した瞬間でした。翌年、姉妹が写真の鑑定を依頼した結果、写真の少年が、谷崎昭治さん(当時13歳)と「同一人物の可能性がある」とされ、2人は『71年かかりやっと会えたね』と感慨げに語り合いました。昭治さんは、8月9日午前11時2分に被爆し死亡。翌日から昭治さんを探しに行った父によると、浦上は原子野と化し周辺には多くの焼死体が散乱してこの世の地獄で死の世界であったそうです。父は、3日間探し回ったが昭治の死体を見つけ出せず、近くで火葬している場に出会い、遺骨の一部を分けてもらったと語りました。

それから数年後、父が死亡。毎年8月9日の平和祈念式典に母と姉妹は参列しました。また、3人は、東本願寺にある、身元の分からない原爆犠牲者の遺骨を集めている収骨堂に昭治の骨があると信じ、原爆忌には必ず訪れました。

平和につながる「あいさつ」も教えていただきました。城山小学校のみんなで大切にしていきます。

あ あいさつ いいのち う うつくしい学校 え えがお お おもいやり